

ベンジャミン・フランクリンの「世俗主義」と「非世俗主義」

—アメリカにおける近代的文化思想の起源—

羽 鳥 修

The “Secularism” and “Non-Secularism” of Benjamin Franklin —One Origin of American Modern Cultural Thought—

Osamu HATORI

〈Abstract〉

Benjamin Franklin (1706-1790) is a figure who lived in a transitional period from the Age of Absolutism to the Modern Times. He was an accomplished businessman, a politician, a journalist, a scientist, an educator, a philosopher, and a social activist and achieved distinguished results in various fields.

The aim of this paper is to consider how American cultural thought has been formed through Franklin's activities in the 18th century. On the one hand, he advocated “the way to wealth,” on the other hand he “preached” the importance of Puritan virtue. How were his “secularism” and “non-secularism,” which were inherent to Franklin's thought, kept in order within himself? That is, were these two elements contradicted within himself, or were they paradoxically matched within himself?

One comes to the following conclusion after considering Franklin's works: his ideal way of life as a “virtuous, free, good man” is implicitly consistent with the ideal of “the pursuit of happiness” in the Declaration of Independence. Franklin's real way of life, however, shows that “the pursuit of happiness” was intended not only for an individual like himself but for all men. Accordingly, his thought and activities were based upon these two elements which seemed to contradict each other but were paradoxically matched, which attests that Franklin was one of the first modern men in America.

1 問題の所在

北米大陸においては17世紀初頭にヴァージニア植民地が建設されたのを皮切りに18世紀前半までに13のイギリス領植民地が建設された。こ

れらの植民地が本国からの独立を宣言したのは1776年のことであり、トマス・ジェファソンらによって起草されたアメリカ合衆国（以下、アメリカと略記する）の独立宣言には以下の文章

がある。

われわれは、次のような真理をごく当たり前のことだと考えている。つまり、すべての人間は創造主によって平等に造られ、一定の譲り渡すことのできない諸権利を与えられており、そのなかには生命、自由、幸福の追求が含まれる。またこれらの権利を確保するために、人々のあいだに政府を作り、その政府には被治者の合意のもとで正当な権力が授けられる。そして、いかなる政府といえどもその目的を踏みにじるときには、政府を改廃して新たな政府を設立し、人民の安全と幸福を実現するのにもっともふさわしい原理にもとづいて政府の依って立つ基盤を作り直し、またふさわしい形に権力のありかたを作り変えるのは、人民の権利である⁽¹⁾。

このようにアメリカ独立宣言に盛り込まれた自然権や人民主権などの思想は、ジャファソン自身によって創造されたものではなく、ジョン・ロックや啓蒙思想家であるルソー、ヴォルテールなどイギリスを初めとするヨーロッパの思想家の考えや、ヴァージニアの権利宣言を書いたジェイムズ・メイソン (James Mason) の考えを援用したものである⁽²⁾。建国の理念を表明したアメリカ独立宣言は、17世紀のイギリスで始まりその後18世紀のヨーロッパで普及した啓蒙思想の影響を受けたものであり、ジャファソン自身もフランスの啓蒙主義者と公私にわたり交流をもっていた。今日から振り返るなら、啓蒙主義に内在する人間の理性に対する信頼は、中世および絶対主義の時代から近代という新しい時代へ移行する過渡期に射した光明であった。なぜなら、自然権および人民主権の思想や人間のもつ理性に対する信頼は近代的価値の基底を成

す不可欠な要素であり、ヨーロッパ社会が長らく封建貴族や国王を国家の頂点とする封建的身分制度のもとに置かれてきたからに他ならない。また、17世紀に始まる科学革命もヨーロッパを支配してきた伝統的な世界観から人々を解放する役割を果たし、それはまた伝統的な宗教観を変化させる推進力となった。

しかし、近代的価値を表明する新しい思想が誕生して普及することと、近代的価値を日常生活において実践することは次元が異なり、新しい価値観の実践は必然的に旧来の価値観との摩擦を伴う。旧来の価値観が支配する時代に近代的価値観を実践することは容易なことではなく、予想以上の軋轢も覚悟しなければならない。この小論の目的は、「代表的アメリカ人」、「アメリカ最初の近代人」、「すべてのヤンキーの父」と評されるベンジャミン・フランクリン (Benjamin Franklin) が、中世及び絶対主義時代の価値観が残存する18世紀という時代のなかで近代的価値観をどのように実践したかを検討し、彼の生きかたが近代市民国家アメリカの根底を成す思想の形成過程とどのようにかかわっているのかを検証することにある。従って、ここではフランクリンの生涯における活動を時系列的に検証するのではない⁽³⁾。本論における作業の手順は、まずアメリカ独立革命を歴史的文脈のなかで位置付けることによりフランクリンが生きた18世紀という時代の特徴を考える。そして、フランクリンの活動に一貫してみられる2面性——「世俗性」と「非世俗性」——を18世紀という時代のなかで検証する。フランクリンの2面性が背反する性格のものなのか、あるいは彼のなかにはあっては背反二律的に整合性をもつ性格のものであるのかを検証することで、アメリカにおける近代的文化思想の形成過程を明らかにしたい。

2 アメリカ独立革命の位置付け

フランクリンは、1706年マサチューセッツ湾植民地の中心地ボストンで蠟燭屋を営む職人の家に生まれる。それはちょうどアメリカ独立宣言が公布される70年前のことであった。フランクリンの没した年が1790年であるから、84年におよぶ彼の生涯はほぼ18世紀全般にわたっていたことになる。また、18世紀後半に13のイギリス領植民地は独立革命戦争を経てアメリカとして誕生する。従って、フランクリンはイギリス絶対主義時代の産物である植民地の時代から近代市民国家アメリカへ移行する時代を生きたことになる。このように時代が大きく移り変わる激動の18世紀に生きたフランクリンを考察するにあたり、ここではアメリカ独立革命を準備する前史として北米におけるイギリス領植民地の社会的特徴を検討しておきたい。

イギリスでは1558年にエリザベス1世が即位して産業と貿易を奨励するとともに海軍を強化し、88年にはスペインの無敵艦隊を撃破するなど絶対王政を確立した。エリザベス1世治世下の16世紀後半にはウォルター・ローレー(Walter Raleigh)率いる植民団を4回にわたってロアノーク島(現ノースカロライナ州)へ派遣した。この試みは失敗に終わるが、チューダー朝で確立された絶対王政を引き継ぐスチュアート朝の祖ジェームズ1世治世下の1607年に北米で最初の恒久的な植民地ヴァージニアが建設された。また、13植民地のなかでヴァージニアに次いで建設されたのがニューイングランドのプリマス植民地であり、同植民地を吸収合併したのがマサチューセッツ湾植民地である。同植民地は1630年にイギリスから渡ってきたピューリタンにより建設され、そこにはその後の10年間に約2万人のピューリタンが移住を続けた。「ピューリタンの大移住」とよばれるこの移動は宗教的動機に基づくものであり、ピューリタニ

ズムは植民地時代だけでなく建国後のアメリカにもさまざまな影響を及ぼすことになる。

ヴァージニアを皮切りとして1832年に13植民地のなかで最後に建設されたのがジョージアである。北米大陸の大西洋岸に建設された合計13の植民地に対するイギリス本国の経営方針は、スペインによって建設された南米の植民地と大きく異なっていた。イギリスの場合は、国王が北米に植民地の建設を申請する者に対して特許状を交付し、それによって植民事業の認可が下されるのであり、会社・領主・王領という植民地形態の相違があるにせよ、ジョージアを除くすべての植民地が民間人によって建設されている。この点は植民地が本国によって直接経営されたスペインの場合と根本的に異なる。ヴァージニア植民地は早くも1619年に植民地議会を開催しており、その下部組織であるタウン・ミーティングとカウンティ・ミーティングという相違はあったが、住民の代表を構成員とする植民地議会が開催されて植民地に係わる事柄を決定したのである。植民地が本国によって直接経営される場合にはこうした自治は認められないのが一般的であることを考えれば、ここに北米イギリス領植民地の注目すべき特徴があった。すなわち、北米のイギリス領植民地は絶対主義王制の産物でありながら、国家事業としてではなく特許状を付与された民間人によって建設されたために経営権が大幅に認められたのである。また、本国と北米植民地の経済関係が「有益なる怠慢」(“salutary neglect”)という表現に象徴されるように、イギリスは植民地に対する規制を緩和することで植民地の経済的發展を促進し、本国の製品を売却する重要な市場になるという判断から緩やか経済的統制を行っていたのである。従って、北米のイギリス領植民地は、大西洋という物理的空間により隔絶していたことも手伝って、植民地でありながら政治的・経

済的に自由を享受することが可能だったのである。

しかし、イギリスは敵対国フランスとの長年にわたる戦争によって経済的困窮状況に陥り、その結果絶対主義体制を維持するための歳入不足を補う方策として砂糖条例(1764年)、印紙条例(1765年)、茶条例(1773年)を課すなど植民地に対して厳しい統制的経済政策を断行した。それは従来から行なわれてきた緩やかな重商主義政策の放棄を意味しており、ここに本国と植民地の「有益なる怠慢」の時代は終止符を打つことになる。13の植民地はとりわけ不満の対象となっていた印紙条例の撤回を求めて対立し、1775年ついに本国との戦争に突入した。本国との対立に際して植民地側が示した不満の根拠は、大陸会議で示された「代表なくして課税なし」(“No Taxation, without Representation”)という論理で、それは植民地人としての権利を擁護する立場に依拠しており、彼ら植民地人は本国の経済政策が変更されるまで享受してきた自由な経済活動に対する新たな規制に反発したのである。この点は、独立革命の指導者の1人であるパトリック・ヘンリー(Patrick Henry)が「我に自由を与えよ、さもなければ死を」(“Give me liberty, or give me death”)と叫び、本国との戦争も辞さない姿勢を表明したことを想起すればよいであろう。

1783年本国と植民地とのあいだでパリ条約が締結され、8年近くにおよぶ独立戦争が終結した。アメリカ独立革命を政治的視点でみるなら、それは共和政という新たな社会体制が誕生したことを意味する。すなわち、それは中世および絶対主義時代における封建的身分制度に基づく社会とは異なる近代的な市民社会が誕生したことを意味する。「生命、自由、幸福の追求」というアメリカ建国の理念が独立宣言に盛り込まれ、そうした理念を法的に明文化したものが合衆国

憲法に追補された憲法修正第1条から第10条よりなる「権利の章典」である。そこには、中世・絶対主義時代には認められなかった人間の生得権としての「自由」と「平等」が保障されている。また、経済的視点でアメリカ独立革命をみるならば、そこにも「自由」と「平等」の概念が反映されている。独立宣言で用いられた「幸福の追求」という表現は抽象的であるが、そこに含意されるものはすべてのアメリカ市民が自由かつ平等に精神的・物質的な豊かさを追求することを可能にする生得権としての諸権利の保障である。重商主義政策の強化に反発して戦闘状態に入っていた植民地人をやがて独立のための戦いへと駆り立てる大きな影響力をもったトマス・ペイン(Thomas Paine)の『コモン・センス』(*Common Sense*)においても、大陸であるアメリカが島国のイギリスに従属することの不自然さを指摘し、独立国家になることによって貿易面で多くの効果が得られると説かれた⁽⁴⁾。これが、新たな課税法を撤回させるための戦いから独立を目指した戦いへと植民地人の意識を変化させる役割りを果たしたことを考えれば、「有益なる怠慢」時代に享受した自由な経済活動に対する権利回復の欲求が、イギリスとの戦いを遂行するための強固な推進力となった点に注目しなければならない。

アメリカ独立革命の位置付けについて、それを政治・経済的視点からアメリカが誕生する前後の社会的変化を比較するなら、次のように総括することができよう。独立革命戦争の勝利によって、アメリカは「政治的な平等」と「経済的な自由」を手に入れることができた。アメリカが植民地から独立国家へ移行したことは、アメリカ「合衆」国という国名が示すように被治者が統治者に代わって国家の中心になったことを意味する。国家の主体は市民であって、もはや国王・貴族ではなかった。独立へと人々を駆

り立てた推進力の1つが自由な経済活動に対する希求であるならば、それは経済活動に対する国家の干渉・介入を否定することを意味する。航海条例など絶対主義体制を支える重商主義政策は、アメリカが独立を達成し新しい国家を誕生させたときに放棄された。国家の介入を可能な限り限定し、個人を主体とした自由な経済活動が可能となると、それは近代市民国家アメリカにおける資本主義経済の誕生を導くことになる。

3 マサチューセッツ湾植民地の建設

フランクリンが生まれたボストンのあるマサチューセッツ湾植民地は、南部および中部の植民地とは異なる性格をもち、そうした特質はニューイングランドに位置するその他の植民地だけでなく北米のイギリス領植民地社会に、そして独立後のアメリカ社会にも影響を及ぼすことになる。その影響とはピューリタニズムであり⁽⁵⁾、フランクリンもまた自己の価値観が醸成される過程でピューリタニズムの影響を受けている。

ニューイングランドにおいて最初に恒久的植民地となったのは1620年にピルグリム・ファザーズ (Pilgrim Fathers、巡礼始祖) により建設されたプリマス植民地であり、それはピューリタンがマサチューセッツ湾植民地を建設する10年前のことであった。プリマス植民地は厳しい生活環境などがあってその後あまり発展せず、結局はマサチューセッツ湾植民地に吸収合併されることになるが、両植民地の建設経緯はイギリス本国における宗教政策と密接に係わっているため、ピルグリムとピューリタンの関係を整理しておかなければならない。

イギリスではエリザベス1世が1559年に統一法を出して国教会 (Anglican Church) の体制が確立された⁽⁶⁾。イギリス国教会は教義・心情面で

はほぼカルヴァン主義を採用しているが、司教 (主教) 制度を維持するとともに礼拝や儀式面でもカトリックの要素を包摂するものであった。その背景には、エリザベス1世が教会を統一して国家機構に組み込むことによって国家・社会の秩序を維持しようという意図がある。しかし、それはカトリックとプロテスタントを折衷する国家的教会体制に不満を抱く人々を生み出す結果を招き、そうした人々の中心がスイスのジュネーブにおけるカルヴァンの宗教改革をモデルとして当時中産階級のあいだで力を増しつつあった長老派 (Presbyterian) であった。国教会のカトリック的要素を排除してこれを純化しようとしたピューリタンの一派である彼らは、王権神授説を唱えるスチュアート朝のジェイムズ1世による専制政治に強く反発した。しかし、ジェイムズ1世はそうした国内における不満層の動きに理解を示さず、ピューリタンへの弾圧を強化した。こうした状況のなかで国教会を否定してそこから分離するという立場を選択したのがピルグリムであり、その点で彼らはピューリタン長老派より急進的であった。分離派 (Separatist) とも言われる彼らは、弾圧を逃れてオランダのライデンに亡命し、そこで10年間定住した後にメイフラワー号で北米に渡りプリマス植民地を建設する。ピルグリムは密かに集まって聖書を読み祈り合ううちに同志の集団を結成したが、そのなかにはのちにプリマス植民地初代総督となるウィリアム・ブラッドフォード (William Bradford) がいた。

ジェイムズ1世の体制に不満をもつその他の集団に会衆派 (Congregationalist) があり、彼らは長老派と同じく国教会の理念は擁護するが、個々の信徒集団の自治を強調して改革の信念を貫徹しようとした。反体制派の聖職者と信徒が密接な結びつきをもつ会衆派の人々が北米に移住して建設したのがマサチューセッツ湾植民地

である。彼らは、改革の模範を荒野で実現することが自らの使命であると自覚して移住したのである。国教会を否定して分離したビルグリンに対して、会衆派ピューリタンは礼拜の純粹さを追求して真の救いを追求し、同時に野心的な彼らは国家・社会にコミットする姿勢を選択した。すなわちピューリタンは宗教的には非分離という会衆派の立場をとり、中産階級として経済的に成長しつつあった彼らは国王によって経済的独占権が付与される大商人への反発を強め、政治的にも議会を通じ自己の諸権利を伸長させようとしたのである。こうした宗教的敬虔さとともに政治・経済的に現実的な対応をする姿勢が会衆派ピューリタンの特徴であることを承知しておかねばならない。

会衆派のピューリタンは1630年マサチューセッツ湾植民地を建設するが、彼らを率い同植民地の初代総督となるジョン・ウィンスロップ(John Winthrop)は乗船してきたアーベラ号上で、

…神とわれわれの間には、目的が存在する。われわれは、この事業のために神との契約に入ったのである。私たちは神の委任を受け入れ、神はわれわれに規約をつくることを委ねられた。私たちは、これらの目的を達成するために、実行にうつることを宣言したのだ。神がわれわれをよみし、祝福してくださるように。…しかし、私たちが目的として提示した規約を遵守せず、神を偽ってこの世に心を寄せ、肉の思いを追い、自分自身と子孫のためにおおいなるものを求めるなら、主は必ず、私たちに怒りを発し、偽りの誓いをたてた者に報復し、契約不履行の代価を思い知らせ給うであろう。

…この目的を達成するために、私たちは、この事業において強く結びつけられて一体と

ならなければならぬ。兄弟のいつくしみをもってたがいをもてなし、…私たちがたずさわっている任務と共同体——同一の体に連なる人々の集まり——とを、かたときも忘れてはならない。

…われわれは丘の上の町となり、あらゆる人の目がわれわれに注がれると、考えねばならぬ。それゆえ、私たちがたずさわっているこの事業において神を偽り、主が現在さしのべておられる援助の手を引いてしまわれることになれば、私たちの噂は知れわたり、この世の物笑いの種となるであろう⁽⁷⁾

と説教した。すなわち、マサチューセッツ湾植民地建設の動機は、神と会衆派ピューリタンのあいだで契約が結ばれ、神に選ばれた自分たちこそが相互の慈愛によって「丘の上の町」(city upon a hill) という共同体を建設しなければならないという自覚的使命感に基づいていた。マサチューセッツ湾植民地はピューリタンの勤勉さによって文化的、経済的、政治的に成熟した社会へと成長し、その中心であるボストンはフィラデルフィアやニューヨークとともに13植民地を代表する都市となる。

4 フランクリンの活動

このようにピューリタニズムの影響を受けて建設されたのがマサチューセッツ湾植民地であり、その中心地がフランクリンの生まれ育ったボストンである。蠟燭職人の次男として生まれたフランクリンは、12歳の頃異母兄弟の兄ジェイムズ(James)が経営する印刷屋で徒弟として働き印刷の技術を学ぶ。しかし17歳のとき親方でもある兄と衝突したことが原因で家を飛び出しニューヨークに向かったが、それはボストンから最も近い印刷機のある都市がニューヨークだったからである。印刷屋に就職を依頼して断

られるが、その人の紹介で彼の息子が経営している印刷屋で人手を欲しがっているので行ってみてはどうかと勧められ、再び船でフィラデルフィアに向かった。結局そこに落ち着いて印刷屋で働き始める⁽⁸⁾。1728年にはヒュー・メレディス (Hugh Meredith) と共同で印刷会社を興し、翌年2人は『ペンシルヴェニア・ガゼット』紙 (*Pennsylvania Gazette*) を買収して実業家として成功を収める傍ら、当時にあつては大胆で進歩的な意見を次々に発表するなど文筆活動も精力的に行なった。フランクリンは、1733年に自ら製作した最初の暦でのちに北米植民地でベストセラーとなる『貧しいリチャードの暦』 (*Poor Richard: An Almanac*) を出版し、著述家・実業家として成功を収めた。

フランクリンはジャーナリズムの分野だけでなく、文化・科学・教育・社会活動等の諸分野でも広範な活動を展開する。そうしたフランクリンの多面的な活動の原点となるのが1727年に結成したジャントー (Junto) である。ジャントーとは「秘密結社」という意味だが、彼によれば「お互いの向上のため」に「才能ある知人の多くを集めて結成」したクラブである。3ヶ月に1度金曜日の晩にメンバーが集まり、クラブはフランクリン自身が作った「すべてのメンバーが順番に倫理、政治、あるいは自然科学などの好きな問題を取りあげて、それについて書いた自分の考えを発表・討議し、真摯な精神で真理」を、そして「人類、母国、友人、または自分たちに役に立てるような何か」を追求するという規約に基づいて行われた⁽⁹⁾。フランクリンがジャントーを立ち上げたのは21歳のときであり、このクラブはその後40年にわたって存続することになる。このクラブでの活動を通じて、例えば共同出資の基金によって設立・運営される巡回式の組合図書館 (Company Library) が誕生している点に注目しなければならない。ジ

ヤントーは議論・思索の場であるが、それはまた実用的なものを生み出す議論の場だったからである。そしてフランクリンによれば「最初の公的活動」となるのが1731年に建設されたこの組合図書館であった。当時公立ないし準公立図書館はあったがこうしたタイプの図書館は北米最初のものであり、これがのちにフィラデルフィア図書館となる⁽¹⁰⁾。その他、1736年に消防組合 (Union Fire Company) を設立し⁽¹¹⁾、1744年には「アメリカにおけるイギリス領植民地のあいだに有用な知識を増進せしめる」ことを目的とするアメリカ学術協会 (American Philosophical Society) を立ち上げ⁽¹²⁾、1749年には「ペンシルヴェニアに関する不満の1つが若者を教育する大学がなかった」という思いからフィラデルフィア学院 (Philadelphia Academy) を設立した⁽¹³⁾。このように、ジャントーはフランクリンの社会的活動を生み出す原点の場であった。

フランクリンは優れた科学者・学者としても拔きん出ていた。家庭の経済的事情により10歳から父の仕事を手伝い、12歳からは兄が経営する印刷屋で働き始めたため、8歳から読み書き算術の初歩を学校で学んだにすぎない⁽¹⁴⁾。しかし活字に囲まれて育った環境と彼自身の探求心や努力が優れた業績を生み出すことになる。自叙伝のなかで「毎日時間を作り図書館で1、2時間勉強することで、父親が望んだにもかかわらず受けなかった学校教育の不足分をある程度補足した。読書は、私が自らに許した唯一の娯楽であり、タヴァーン (酒場の意) やゲームなど浮かれて遊ぶ類のことに費やす時間はまったくなかった [() 内筆者]」という⁽¹⁵⁾。1739年から翌年にかけてペンシルヴェニア・ストーブ——室内に取り付ける煙突付き暖炉で使用される鉄製のストーブのことで、フランクリン・ストーブとも呼ばれる——を開発した。また、1751

にはロンドンで『電気に関する実験と観察（第1部）』（*Experiments and Observations on Electricity*）を出版して避雷針の提案をしている。そして1752年には凧を使って実験を行ない、稲妻と電気が同一のものであることを実証した⁽¹⁶⁾。フランクリンは1756年にハーバード大学とイエール大学で学位を取得し、イギリス王立協会からコプレー賞（Gold Medal of Sir Godfrey Copley）を授与されるなど科学者・学者としての業績が高く評価された⁽¹⁷⁾。新しいタイプの図書館、消防組合、学校の設立にせよ、避雷針やストーブの発明などにせよ、それらはフランクリンによれば「私たちは他人の発明から多大な利益を享受するように、私たちの発明によって他人に貢献する機会を持つことができることは喜ぶべきことであり、相互に利益をもたらす発明を自由かつ広範に行なうべきである⁽¹⁸⁾」という考えに基づいている。彼は公益に役立つ施設や発明を広く社会に貢献しうる有益な社会的活動でなければならないと位置付けていたのである。

政治家としてのフランクリンの活躍はさらに顕著である。彼は1748年にフィラデルフィア市会議員に選出され政治の世界に足を踏み入れた。その後は51年にペンシルヴェニア植民地議会の議員に選出され、53年には北米郵政副長官に任命される。1764年にはペンシルヴェニア植民地議会議員選挙で初めて僅差で敗北して13回連続当選の実績に終止符をうつが、その頃重商主義政策を強化するために制定された一連の課税法によってイギリス本国と植民地の関係が悪化しつつあった。フランクリンはロンドンに渡って印紙法の撤回を求める文筆活動を行うが、本国と植民地の関係修復が困難であると判断して1775年3月にロンドンを去ってフィラデルフィアに戻った。その間4月にはすでにボストン郊外のコンコードとレキシントンで武力衝突が勃

発し、本国と植民地は戦闘状態に突入していた。フィラデルフィアに戻ったフランクリンは第2回大陸会議のメンバーに選出されとともに、76年には5名から成る独立宣言の起草委員会のメンバーとなる。フランクリンはリチャード・ヘンリー・リー（Richard Henry Lee）が「これらの結合した植民地が自由で独立した邦となることは当然のことであり正当である」と主張する立場を支持した⁽¹⁹⁾。そして若干の修正が加えられた独立宣言案は7月2日に大陸会議で採択され、2日後の7月4日に公布された。フランクリンは同年12月にフランスに渡って通商および同盟条約を締結することで経済的・軍事的援助を得るためにジャファソンやジョン・アダムズ（John Adams）らと奔走し、78年の米仏同盟条約締結にこぎつけたことは戦力的に劣るアメリカにとって大きな意味をもった。そして1781年6月にはアダムズ、ジョン・ジェイ（John Jay）、ジェファソンらとともに終戦条約締結のための委員としてその任にあたり、83年にはアメリカ独立の承認を盛り込むパリ条約の締結を導いたのである⁽²⁰⁾。このようにアメリカ独立革命においてフランクリンの果たした功績はきわめて大きかったと言わねばならない。

独立達成後もフランクリンは政治の世界に身を置きながら、その他の公的活動にも携わった。1885年にはペンシルヴェニア州知事に選任され、同職を88年まで務めた。また87年には連合規約（Articles of Confederation）に替わる基本法を制定するために召集された憲法制定会議に邦の代表として出席し、合衆国憲法の前案作成に参加した。1790年2月フランクリンは、ペンシルヴェニア奴隷制廃止協会（Pennsylvania Abolition Society）が提出した奴隷制と奴隷売買に反対する議会宛の嘆願書に署名し、これが彼の書いた最後の公的文書となる⁽²¹⁾。フランクリンは4月17日フィラデルフィアにおいて84年と3

ヶ月の生涯を閉じるが、印刷工、企業家、政治家、発明家、著述家、教育者、科学者、哲学者、啓蒙思想家、奴隷解放主義者、社会活動家として広範囲に活動し、それぞれの分野で顕著な業績を残した。こうした活動からフランクリンは「代表的アメリカ人」と評される。

5 結語

このように多くの分野で活動したフランクリンであるが、ここでは1733年の初版からベストセラーとなり、その後毎年刊行された『貧しいリチャードの暦』に収められた格言を1758年に編集・出版した『富にいたる道』(*The Way to Wealth*)、そして彼の代表作である『ベンジャミン・フランクリン自叙伝』(*The Autobiography of Benjamin Franklin*)などの著作を通じて彼の生き方を考えてみたい。

『富にいたる道』という著書のタイトルは極めて刺激的である。4で概観したフランクリンの政治家、教育者、社会活動家としての活動とは馴染まないように思えるからである。

…1733年の暦で言っているように「天は自ら助ける者を助ける」…「無精は錆のようなもので、労働より早く消耗させる。使っている鍵はいつも光っているのに」と貧しいリチャードも言っている。…しかし、「…時間を浪費してはならない。貧しいリチャードが言っているように、人生は時間を材料にしてできているのだから。…眠っている狐は鳥を捕えない。墓場では十分にねむれるだろう。…失った時間は再び見つけることはできない。…さあ、立ち上がって働こう。目的に向かってとりかかろう。勤勉によってわれわれは、たいした問題もなく仕事が捗る。怠惰は、貧しいリチャードも言っているように、万事を困難にするが、勤勉は万事を容易にする。…仕

事を追い、仕事に追われてはならぬ。早起きは人間を健康に豊かに賢明にする。

…しかし、もしわれわれの勤勉をもっとたしかなものにしたいと思ったら、これに儉約を加えねばならぬ。…貧しいリチャードが言っているように、「台所が肥えると、遺言はやせるものだ」。…貧しいリチャードがいみじくも言っているように、「空の袋は真すぐに立たない」。そこで借金をかかえて朝起きるより、夕食抜きで寝の方がいい。手に入れられるものは手に入れ、手に入れたものはしっかりつかみなさい。これがすべての鉛を黄金に変える石である⁽²²⁾。

すなわち、富を得るには勤勉、規律、儉約、質素、節制が必要だと説かれている。フランクリンは物質主義的に成功することの大切さを説いている点で世俗的行為を積極的に肯定している。

こうした人間としてあるべき日常生活の姿勢についてフランクリンは、1. 節制、2. 沈黙、3. 規律、4. 決断、5. 儉約、6. 勤勉、7. 誠実、8. 正義、9. 中庸、10. 清潔、11. 冷静、12. 純潔、13. 謙虚という順に13の徳目を列挙している。ただし、フランクリンは13の徳目を列挙したあと、これらの徳すべてを同時に習慣として身につけるべきだと言っているのではなく、あるとき1つの徳を身につけることを目標として設定し、その目標が達成できたなら次の徳を設定して身につけていくという具合に最終的に13の徳が習慣化できるようになると説明している。さらに、フランクリンは徳の習慣化を毎日自己点検するための週間予定表を作成し、それを継続して行なったという⁽²³⁾。フランクリンは、こうしたある種の行き過ぎた観が否めないほどの生真面目さをもつが、「規律」という徳を習慣化することの困難に直面して「心底悩みながら結局はほとんど習慣化することができず、

その試みをほとんど放棄してしまおうとさえ思った⁽²⁴⁾」と告白している。フランクリンは富を獲得する物質的な成功という世俗的な行為を奨励し、それを成し遂げるための根本として13の徳目を掲げているが、それらの徳目に共通する思想はピューリタニズムに通じる。従って、フランクリンのなかには富の蓄積という世俗性と宗教の教えに基づく徳目の実践という非世俗性が並存していることになる。

では、一見するとこの2つの相反する特性は、フランクリンのなかでどのように位置付けられていたのであろうか。この問題を考えるうえでフランクリンと宗教の係わりを解明しなければならない。すでに3で説明したとおり、フランクリンが生まれ育ったのはピューリタンの建設したマサチューセッツ湾植民地の中心ボストンであり、彼自身も敬虔なピューリタンの家庭で育った。フランクリン家は代々宗教的にはプロテスタントで、父ジョシア (Josiah Franklin) の後妻となる母アビア (Abiah) は、ニューイングランドの初期開拓に加わった移住者の娘で、マサチューセッツ湾植民地において影響力をもったコットン・メイザー牧師 (Cotton Mather) の影響を受けていたし、ジョシアはベンジャミンに礼拝への出席を求め将来は牧師になることを希望していた。ベンジャミン自身も「幼いときに両親から宗教的影響を受けた⁽²⁵⁾」ことを認めている。

しかし、フランクリンは青年期を迎える頃になると、宗教について彼自身の考えをもつようになる。例えば、幼少時から出席を強要された礼拝の出席について、父親の保護下にあるあいだはそれが義務であると考えていたが、礼拝がある日曜日は読書に時間を割いたために必ずしも毎回出席しなくなった⁽²⁶⁾。要するに、フランクリンは礼拝への出席より読書を重視していたのであるが、宗教との関係でより重要なことはフ

ランクリンの神に対する考え方である。1728年に出版した『信仰箇条と宗教的行為』において

わたしは、一つの至上の、最も完璧な存在、神々自身の創造主であり、父であるものが、存在することを信じる。というのは、一人を除き、人間は最も完全な存在ではなく、人間より劣った多くの地位のものがあるように、人間より優れた多くの地位のものがあることを、わたしは信じるからである。…

…わたしは、神がよき存在であると思う。そして、わたしはこのように賢く善良で力のある存在を友人にすることができたら嬉しいから、どのようにしたら神に気に入られるか考えてみよう。

その知恵からして当然、人は神を誉め奉るのであるが、それに次いで神が満足され、喜ばれるのは、自ら創造されたものが幸福になることであると、わたしは信じる。善良でなければ、人はこの世では幸福にはなれないのだから、神はわたしが善良であることを喜ばれるであろうと、わたしは確信するのである。神はわたしが幸福であれば、満足されるであろうから⁽²⁷⁾

と書いている。神の存在を認め、神と自己の関係を「友人」として捉え、神は人が善人で幸福であることを喜び満足するという。ただし、フランクリンは自叙伝において、「15歳になる頃には…神の啓示それ自体に疑問をもつようになった。論駁するのに引用された理神論者の考えのほうが、それを非難する考え方よりもはるかに私には訴えるものがあった。つまり、まもなく私は徹底した理神論者になった⁽²⁸⁾」と書いている。また、宗教上は長老派教会の教えを受けたことを認めながらも

永遠なる神意、神の選びと遺棄などその宗派の教条は私にとって理解できないものであったし、その他教義に示された幾つかの教えも疑わしいものであった。日曜日は勉強をする日になっていたので、すでに長老派教会の公的な集まりには出席していなかった。しかし、私のなかに幾つか宗教的信条がなかったわけではけっしてない。例えば、神の存在、神が世界を創造したこと、世界が神により支配されていることを疑ったことはなかった。神がなし給うことは人間に対して善をなすことであり、われわれの魂は不滅である。現世であろうとあの世においてであろうと、すべての罪は罰せられ、すべての徳は報われるのである。こうした考えはすべての宗教にとって基本的な考えであると思う。そうした考え方は私たちの住む場所に存在しているすべての宗教に見出せるものであるため、私は…程度の差はあるにせよ、すべての宗派に対し敬意を払っている⁽²⁹⁾

と記し、神の存在を認めるとともに宗教的寛容さというフランクリンの宗教的立場が示されている。また彼は、長老派教会に属す知り合いの牧師から教会の礼拝に出席するよう要請されたことについて以下のように記している。

もし彼が優れた牧師であるなら、日曜日が勉強する日になっていても続けて出席していたであろう。だが、彼の説教は主に長老派教会独自の教義に関する偏った議論であり解説だったので、すべてが無味乾燥で興味がわからず、啓発されない内容であった。というのも、1つたりとも道徳上の考えについて説き聞かせるものではなく、説教の目的は私たちを長老派教会員にさせることを求めるものであって、私たちを良き市民にするというものではなか

ったからである⁽³⁰⁾。

フランクリンの思想と行動を検証するうえで注目したいのは、上記の引用中にある「良き市民」という表現がもつ意味である。フランクリンは神の存在を否定しなかったし、宗教が持つ意義と信仰の重要性を認め、プロテスタント諸宗派の存在を容認するとともにすべての宗派に敬意を払っていた。ただ理神論者となった彼は「人間と人間が触れ合うとき嘘をつかないこと、誠実であること、高潔であることは、人生における至福にとってもっとも大切なものであると確信するようになった⁽³¹⁾」と書いている。そうした徳を身につけている人が「良き市民」であり、人が「良き市民」であるか否かの判断は神により下されるものではなく、人間と人間の関係によって決定されると考えたフランクリンは、「すべての人間のなかには、何か目に見えぬ力を信心したり、崇拜したりさせる、本然の性能のようなものがある。また、人間には、この世で知られているほかのすべて動物に勝って、理性が具わっている⁽³²⁾」として、人間に内在する理性に信頼をおいていたのである。ここにピューリタンの予定説は否定されることになる。神の啓示に懐疑的で理神論者となったフランクリンにとっては、現世におけるすべてのことは神の意志によるものでもなければ、神によって判断されるものでもない。だからこそ、「良き市民」となるために13の徳目を掲げて実践しようとしたのである。徳を身につけた人こそが「良き市民」であり、そうなることが神の御心に沿うことであると考えたのである。

すべての人が自己の行動次第で「良き市民」となることが可能であり、それが神の御心に沿うことになるのであれば、そうした生き方が人生の目標となる。その意味で、13の徳目を実践して富を蓄積することそれ自体は人生の目標で

はなくなる。徳を身につけて実践を積み重ねることで人は「良き市民」となることが可能であり、そうなれば富の蓄積は結果としてもたらされるのである。ただ、フランクリンは規律という徳目の習慣化を初めとしてその他の徳目の場合も十分達成できなかったと謙虚に振り返りながら、「徳を身につけるために努力をしてみた。しかし、実際に努力しなかった場合と比べてみると、努力したからこそ私は善良で幸せな人間であった⁽³³⁾」と記している。彼の言葉は、人生で重要なことは単に物質的に豊かになるという結果そのものではなく、結果がもたらされるまでの過程において人がどのように生きるかが重要であることを示唆している。フランクリンの自叙伝を通じて『富にいたる道』を再考するとき、そこに彼の人生哲学を看取することができる。つまり、フランクリンにとって富の獲得は人生の最終的な目標ではなく、13の徳目を実践することが結果として富をもたらしことに繋がることを強調しているのであり、物質的な豊かさを享受するための生き方を肯定しているのではない。理性を備えた人間が徳を身につけ善行を実践する良き市民となることこそ、フランクリンが重視した「信仰」である。こうしたフランクリンの「信仰」には、中世・絶対主義時代の伝統的な価値観、例えば宗教と人間の関係、人と人との関係を大きく変化させる要素が内在する。なぜなら、すべての人が「良き市民」となる可能性をもつという考えは、旧来の伝統的な価値観あるいは人間観から解放された「自由な市民」の存在と「自由な市民」によって構成される社会を前提としているからである。換言するならば、伝統的な宗教観や旧来の人間関係を支えてきた価値観から人間と社会を解放することを意味していたからである。

兄との確執が原因でボストンを飛び出してフィラデルフィアに生活の拠点を置いたのも偶然

ではない。フランクリンが生まれ育った18世紀前半のボストンは建設された頃とは異なりピューリタンの宗教色もかつてほど強くはなくなっていた。ただ、プロテスタント諸宗派に対して敬意を払い信仰の自由を肯定する姿勢をとり、印刷技術を活かして生活するという点でフィラデルフィアはフランクリンにとって都合のよい場所であった⁽³⁴⁾。そして敬虔なクエーカー教徒であるウィリアム・ペン (William Penn) により建設されたペンシルヴェニア植民地の中心地フィラデルフィアは、ボストンと比べて宗教的・文化的に旧来の価値観から解放された自由な雰囲気を持ち、その香りをフランクリンは感じ取っていたのであろう。

「束縛から解放され、徳を身につけた自由で良き市民」というフランクリンが理想とした人間像とその理想に向け善行を実践する生きかたは、「幸福の追求」という独立宣言に盛り込まれた思想に通じる。理神論者であることを自認するフランクリンであったが、それは宗教上の教義に対する彼の考えを語っているだけではない。むしろ神を主体として「来世おける魂の救済」を考えるのではなく、人間を主体として「現世における幸福」を重視するというフランクリンの宗教観を語っているのである。その意味で、フランクリンの立場は、「伝統的な宗教観に対する近代的解釈」に基づくものであるともいえよう。そうしたフランクリンの思想は啓蒙思想家や理神論者からの援用であるが、1市民として——フランクリンは生涯「フィラデルフィアの印刷業者」と名乗った——近代が到来する以前にそうした生きかたを実践した点に「アメリカ最初の近代人」たる所以がある。しかも、フランクリンにとって「幸福の追求」は彼自身のためだけでなく、社会全体に適応されるべきものであったことも付言されなければならない。フランクリンにとって活動の基盤であったジャントー

は単に議論を重ねる場ではなく、議論と思索を通じて社会に貢献する施設や機関を創出する場であったことはすでに言及したとおりである。フランクリンにとって、机上の議論も社会貢献につながる実用的な議論に発展しなければならなかったし、そうした姿勢は科学者として彼が手掛けた発明や社会活動家として残した業績が証明している。フランクリンが生涯目標とした「幸福の追求」は、個人のための「幸福の追求」であると同時に、個人の集合体である社会のための「幸福の追求」でなければならなかった。中世・絶対主義時代には認められていなかったすべての人間が「幸福を追求できる自由な社会」というフランクリンの理想は、アメリカ独立宣言の盛り込まれた理念と合致するし、それはまた「すべてのヤンキーの父」というフランクリンの評価にも通じる。徳を身につけるという精神的な要素と実践・実験・挑戦など行動上の要素両方を同時に実践したフランクリンの生きかたは、彼の思想に内在する世俗性と非世俗性が逆説的な関係として整合されていたことを示している。フランクリンは『ペンシルヴェニア・ガゼット』紙にたびたび自分の意見を「率直」に書いたが、それを心配した父親に以下の書簡を送っている。

母上は、息子の一人がアリウス派（キリストの神性を否定）、もう一人がアルミニウス派（神意による予定を否定）なのでお嘆きのようです。アルミニウス派が何であり、アリウス派が何であるか、わたしがよく知っているとは申しません。…正統主義が美德よりも尊重されるようなとき、「生きた宗教」というものはいつも苦難を受けてきたと思います。聖書によりわたしは、最後の審判の日には、われわれが「考えた」ことではなく、「した」ことによって裁きを受けるのであり、われわれが

「主よ！主よ！」と言ったからではなく、同朋たちに善をなしたことがよしとされるのであると確信しています⁽³⁵⁾。

注

- (1) 大下尚一・有賀貞・志邨晃佑・平野孝編『史料が語るアメリカ メイフラワーから包括通商法まで 1584—1988』（有斐閣、1989年）35頁。
- (2) ジェファソンは、メイソンがヴァージニアの権利宣言のなかで用いた「それらの権利 [万人が有する自然権] の中には、財産を獲得所有し、幸福と安全とを追求し獲得する手段を伴って、生命と自由とを享受することが含まれる」という文章を参考にしたものと思われる。大下尚一・有賀貞・志邨晃佑・平野孝編『世界歴史大系 アメリカ史1 17世紀—1877年』（山川出版、1994年）、136頁。
- (3) Leonard W. Labaree, Ralph L. Ket-cham, Helen C. Boafield, and Helene H. Fineman ed., *The Autobiography of Benjamin Franklin* (Yale University Press, 1964) の pp. 303—325にはフランクリンの年表 (Franklin Chronology) が付されていて便利である。尚、同書は以下 *Autobiography* と略記する。
- (4) トマス・ペイン著（小松春雄訳）『常識』（岩波書店、1976年）
- (5) ピューリタニズムに関しては、例えば大下尚一「ピューリタニズムの伝統と変容」5—25頁。大下尚一訳・解説『アメリカ古典文庫—15 ピューリタニズム』（研究社、1976年）所収が役立つ。
- (6) イギリスでは、テューダー朝第2代国王ヘンリー8世が王妃との離婚許可を拒否されたためローマ教皇と絶縁し、1534年に首

- 長令を出して自らが国内における教会の主権者であることを宣言した。後継者のエドワード6世のもとではプロテスタントの教義を盛り込んだ一般祈禱書が作成されたが、女王メアリ1世はカトリックの復活を企てた。こうした流れのなかで即位したのがエリザベス1世である。
- (7) 大下尚一・有賀貞・志邨晃佑・平野孝編、前掲書、9—10頁。
- (8) *Autobiography*, pp. 70—71. フランクリンはその間ロンドンに渡り印刷屋で働いている *Ibid.*, p. 303.
- (9) *Ibid.*, pp. 116—117. ベンジャミン・フランクリン「相互の向上のために設立されたクラブの会則」(池田孝一訳・亀井俊介解説)『アメリカ古典文庫—1 ベンジャミン・フランクリン』(研究社、1975年)、35頁。
- (10) *Ibid.*, pp. 130, 141—142.
- (11) *Ibid.*, pp. 174—175.
- (12) *Ibid.*, pp. 181—182.
- (13) *Ibid.*, pp. 192—93. これはフィラデルフィア・アカデミー・アンド・カレッジ (Philadelphia Academy and College) を経て、現在のペンシルヴェニア大学 (University of Pennsylvania) となる。
- (14) *Ibid.*, pp. 52—53. フランクリンはサイレンス・ドゥーグッド (Silence Dogood) という匿名で兄ジェイムズの発行する『ニューイングランド・クーラント』(*New England Courant*) 紙に兄に内緒でたびたび投稿している。それらの文章は他人の模倣ではあったが、16歳の少年が書いたものにしては驚くほどしっかりとした構成になっていたという。 *Ibid.*, p. 68. (footnote 2)
- (15) *Ibid.*, p. 143. 同協会はアメリカにおける最古の学術協会である。
- (16) *Ibid.*, pp. 196, 240—242.
- (17) *Ibid.*, pp. 245—246, 306. フランクリンは、1758年にはセント・アンドリューズ大学 (University of St. Andrews) から法学博士号を取得以降「フランクリン博士」 (“Doctor Franklin”) と呼ばれるようになり、オクスフォード大学からも民法学博士を授与されている。 *Ibid.*, p. 307.
- (18) *Ibid.*, p. 192.
- (19) *Ibid.*, p. 314.
- (20) *Ibid.*, pp. 315—319.
- (21) *Ibid.*, p. 322.
- (22) 大下尚一・有賀貞・志邨晃佑・平野孝編、前掲書、21—22頁。
- (23) *Autobiography*, pp. 150—155.
- (24) *Ibid.*, p. 155.
- (25) *Ibid.*, pp. 50—52, 145.
- (26) *Ibid.*, pp. 51—51.
- (27) 『アメリカ古典文庫—1 ベンジャミン・フランクリン』、88—90頁。
- (28) *Ibid.*, pp. 113—114.
- (29) *Ibid.*, pp. 145—146.
- (30) *Ibid.*, p. 148. しかし、長老派も会衆派ともにカルヴァン主義から誕生したもので、両派は18世紀初め頃までに唯一教会の組織と運営の相違を除いてほとんど大きな違いはなくなっていたという。 *Ibid.*, pp. 145—146. (footnote 8)
- (31) *Ibid.*, p. 114.
- (32) 『アメリカ古典文庫—1 ベンジャミン・フランクリン』、89頁。
- (33) *Ibid.*, p. 156.
- (34) フィラデルフィアはボストンに次いで早く印刷機を備えた都市であり、新聞の発行も3番目に始まっている。『アメリカ古典文庫—1 ベンジャミン・フランクリン』、9頁。北米の英領植民地における最

初の新聞は1704年に『ボストン・ニューズ
レター』(*The Boston News-Letter*)、1719
年に『ボストン・ガゼット』(*The Boston
Gazette*)、同年『アメリカン・ウィークリー・
マーキュリー』(*The American Weekly
Mercury*) がフィラデルフィアで発行さ
れ、1721年兄ジェイムズの興した『ニュー
イングランド・クーラント』が4番目にな
る。*Autobiography*, p. 67. (footnote 9)

- (35) 『アメリカ古典文庫—1 ベンジャミン・
フランクリン』、96頁。